

I 少年院における「相撲大会」が矯正教育に及ぼす影響

－相撲大会前後の大会に対する態度変容について－

○山村昌代（東海大学大学院）

大堀孝雄（東海大学）

I. 目的

少年院とは、家庭裁判所から送致された非行のあった少年に対し、非行の原因を見つけて改善させ、円滑に社会復帰させるために教育を行う施設であり、ここで展開される教育を矯正教育という。矯正教育の内容及び方法として、生活指導、職業補導、教科教育、そして保健体育及び特別活動が行われる。その中で、I少年院は全国の少年院でも珍しい「相撲」の練習を約2ヶ月間、保健体育の教材の一つとして実施している。その総仕上げとして、多数の来賓を招待し、大相撲のY相撲部屋を迎え、「力士による模範稽古」「力士と院生のぶつかり稽古」、そして院生同士による「トーナメント戦」等の活動を織り込んだ「相撲大会」を特別活動の一環として、開催している。

昨年度の相撲大会に参加した少年の感想文や職員からの話を併せると練習段階では、相撲大会の実施に対して消極的な態度であった者が、大会参加後には、積極的な態度を示す者が多いことが伺えた。そこで、本研究では、相撲大会前後の大会の実施に対する態度に及ぼす要因を相撲大会の活動内容から探ることを目的とした。

II. I少年院の「相撲大会」の概要

1961年、大相撲のY相撲部屋の親方がI少年院を慰問したのをきっかけに、毎年力士らを迎えて開催。1962年には屋根付きの土俵を設け、体育の授業の中にも「相撲」を取り入れた（相撲大会前の約2ヶ月間）。大会では、安全祈願の神事「土俵祭り」が行司によりなされ、「力士による模範稽古」「力士と院生とのぶつかり稽古」、また院生同士による「トーナメント戦」、その中での「行司のしきりによる取組」が行われる。大会終了後、力士らによる「ちゃんこ鍋」が出されるという特色を持った行事となっている。

III. 研究方法

1. 調査対象者

I少年院在院中の男子117名、そのうち入院して間もない3名を除く、相撲大会に参加した、15～21歳の114名を対象とした。

年齢	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	21歳	計
人数	2	9	18	24	27	19	1	114

2. 調査方法

本調査は、1997年5月29日相撲大会終了後、自記式質問紙を、一斉に配布し、無記名で回答を求めた。（有効回答率100%）

3. 調査内容

質問紙は、相撲大会前後の大会実施に対する態度として「やりたい・やりたくない」の質問と相撲大会の具体的な活動内容の 18 項目からなっている。各の項目に対して〔楽しい〕〔つまらない〕〔いやだ〕〔興味〕〔励まし〕〔自信〕〔感動〕の 7 つの感情表現を 5 段階評定で回答を求めた。7 つの感情表現の言葉は、昨年度の感想文から、抽出した。

4. 集計の処理

(1) 単純集計

相撲大会前後の大会実施に対する態度で、「わからない」「どちらともいえない」と回答した者を除く、91 名を対象とした。その上で、相撲大会前後ともに「やりたい」と答えた者をⅠ群（43 名 47.3 %）、大会前は「やりたくない」と答え、大会後には「やりたい」と答えた者をⅡ群（35 名 38.5 %）、大会前後ともに「やりたくない」と答えた者をⅢ群（13 名 13.7 %）の 3 つの群に分類した。なお、大会前には「やりたい」と答えたが、大会後には「やりたくない」と答えた者が 1 名であったことから個別に検討することとした。

そして、活動内容に対する 5 段階評定のうち「とても感じた」「まあまあ感じた」を選択した者の割合を算出し、活動内容項目と感情表現の関係を比較検討した。

(2) 大会後の相撲大会実施に対する態度の判別分析（ステップワイズ法）

大会後の相撲大会実施に対する態度から、「どちらともいえない」と回答をした者を除いた 95 名を対象に大会後に相撲大会をもう一度「やりたい」群（80 名 84.2 %）と「やりたくない」群（15 名 15.8 %）を目的変数に、また 18 項目を説明変数として 7 つの感情表現別に判別分析（ステップワイズ法）を行った。

IV. 結果

1. 活動内容項目と感情表現について

1) Ⅰ群、Ⅱ群間で同様の傾向を示した項目

Ⅰ群とⅡ群では、各活動内容項目において、感情表現の割合がほぼ同様の傾向を示した。

〔楽しい〕〔興味〕〔感動〕：各項目で約 70～90 %となっているが、その中で「力士による模範稽古」「力士と院生によるぶつかり稽古」が約 80～90 %である。しかし、〔興味〕での「まわしをつける」で、Ⅰ群が 69.7 %に対し、Ⅱ群が 31.4 %と差が大きい。

〔励まし〕〔自信〕：各項目で約 50～90 %となっているが、その中で〔励まし〕での「仲間との応援」でⅠ群が 93 %、Ⅱ群 88.5 %。〔自信〕での「力士と院生によるぶつかり稽古」でⅠ群が 83.7 %、Ⅱ群が 88.5 %と高い。反対に、〔励まし〕での「まわしをつける」でⅡ群が 42.8 %、〔自信〕での「行司による土俵祭り」でⅠ群が 44.1 %、Ⅱ群が 45.7 %と低い。

〔つまらない〕〔いやだ〕：各項目で約 20 %～0 %となっているが、その中で、〔いやだ〕

での「まわしをつける」でⅠ群が 25.5 %、Ⅱ群が 42.8 %と高い。反対に、〔つまらない〕〔いやだ〕とまったく感じなかった (0 %) 項目は、Ⅱ群の〔つまらない〕での「本格的な相撲の経験」、「大会で体を動かしたこと」「1対1での取組」の3項目のみであった。

2) Ⅱ群がⅠ群より高い割合の主な項目

〔楽しい〕での「勝ち負けを決める」でⅠ群が 65.1 %、Ⅱ群が 82.8 %。〔興味〕での「1対1での取組」でⅠ群が 62.7 %、Ⅱ群が、74.2 %、「体の大きさ違う相手との取組」でⅠ群が 58.1 %、Ⅱ群が 68.5 %。〔感動〕での「先生からの応援」でⅠ群が 67.4 %、Ⅱ群が 80 %、「来賓からの応援」でⅠ群が 65.1 %、Ⅱ群が 77.1 %。〔励まし〕での「力士と院生による」でⅠ群が、81.3 %、Ⅱ群が 91.4 %、「1対1での取組」でⅠ群が 65.1 %、Ⅱ群が 77.1 %。〔自信〕での「来賓からの応援」でⅠ群が 65.1 %、Ⅱ群が 77.1 %、「1対1での取組」でⅠ群が 72 %、Ⅱ群が 80 %、「力士と院生によるぶつかり稽古」でⅠ群が 83.7 %、Ⅱ群が 88.5 %。

3) Ⅲ群と他の群との比較

Ⅲ群は、Ⅰ群、Ⅱ群と比べ、活動内容項目により感情表現の割合の差が大きい。

〔楽しい〕〔興味〕〔感動〕:「力士による模範稽古」「力士と院生によるぶつかる稽古」が約 70 ~ 80 %で、Ⅰ群、Ⅱ群と同様に高い。反対に、〔楽しい〕での「まわしをつける」が 7.6 %、〔興味〕での「体の大きさの違う相手との取組」が 0 %と最も低い。

〔励まし〕〔自信〕:〔励まし〕での「まわしをつける」「屋外での大会」「裸足での大会」、〔自信〕での「裸足での大会」が 0 %となっている。

〔つまらない〕:「行司による土俵祭り」が 53.8 %と突出して高い。反対に、「力士によるちゃんこ鍋」「力士による模範稽古」は 0 %となっている。

〔いやだ〕:「まわしをつける」が 69.2 %と突出して高い。反対に、「力士による模範稽古」「行司のしきりによる取組」「力士によるちゃんこ鍋」が 0 %となっている。

4) 大会前に好意的態度から、大会後に非好意的態度に変容した1名について

各活動内容項目に対する感情表現は、全体として、Ⅱ群と同様の傾向が見られた。しかし、〔楽しい〕では、ほとんどの項目に「とても感じた」・「まあまあ感じた」に回答している者がⅠ群、Ⅱ群で多いのに対して、この者は、「土俵に上がる」「屋外での大会」「力士による模範稽古」「力士と院生によるぶつかり稽古」「行司による土俵祭り」「行司のしきりによる取組」「力士によるちゃんこ鍋」の7項目のみである。

2. 相撲大会後の大会実施に対する態度の判別分析 (ステップワイズ法) の結果

大会後の相撲大会をもう一度「やりたい」と判別するのに影響する要因として、「勝ち負けを決める」に「自信がついた」「楽しいと感じた」こと、「1対1での取組」に「いやだと感じた」こと、「裸足での大会」に「いやだと感じた」、「まわしをつける」に「興味を感じた」ことが挙げられた。

反対に、相撲大会をもう「やりたくない」と判別するのに影響する要因として、「屋外での大会」に「いやだと感じた」こと、「仲間との応援」に「つまらないと感じた」ことが挙げられた。

V. 考察

1. 相撲大会後の大会実施に対し、好意的態度を示したⅠ群、Ⅱ群は、活動内容項目に対する感情表現に同様な傾向を示しており、ほぼ同質と見ることができる。しかし、その中で、Ⅱ群がⅠ群を上まわった活動内容項目を見てみると、自らが相撲を取ったこと、他者である来賓と先生からの応援、そして力士との直接的な触れ合いによる経験と考えられる。これらの経験は、自己存在と自己表現の感情を刺激し、好意的態度の変容に一定の影響を与えたと同え、態度変容の要因と推測される。また、Ⅰ群、Ⅱ群を合わせた78名(85.5%)の者が、活動内容項目に対して積極的評価を示したことは、相撲大会実施に対する好意的態度の変容に、かなりの影響を及ぼしていることが推測される。

2. 非好意的態度を示したⅢ群(13名 14.4%)は、活動内容項目に対する感情表現の割合で、Ⅰ群、Ⅱ群とかなりの差があるが、「力士との模範稽古」「力士と院生によるぶつかり稽古」には、他の活動内容項目に比べ、Ⅰ群、Ⅱ群と同様に積極的な感情を示していることは、力士そのものには関心・興味そして快感情を持ったといえる。

3. 「まわしをつける」ことに、[いやだ]と感じた者がⅢ群、Ⅱ群、Ⅰ群の順に多い。特に、Ⅲ群においては、[楽しい][興味][感動]の感情表現に後ろ向きの影響を及ぼしていることが推測させる。相撲はまわしをつけ、裸になることから、自分の裸を周りの人に見せる(見られる)こと、裸で土俵に倒れることなどがあることから、相撲・相撲大会に対して興味・関心の低い者ほど、非好意的態度の要因に結びつきやすいと考えられる。

4. 判別分析の結果から、もう一度相撲大会をやりたいと判別するのに影響する要因として挙げられた「1対1での取組」に「いやだと感じた」ことは、昨年度の相撲大会に参加した院生の感想文に「やる前は、勝ち負けなんかどうでもいいと思っていた。けれど、実際に1対1で取組をやり、負けたらすごくくやしかった。」という記述が多く見られたことを併せると、実際に「1対1での取組」を行い、負けたことにくやしさを「いやだ」と感じた。そのことから、もう一度相撲大会をやり、再度「1対1で取組」をしたいという気持ちが考えられる。反対に、もう「やりたくない」と判別するのに影響する要因として挙げられた「屋外での大会」に「いやだと感じた」ことは、相撲大会がまわしをつけての屋外の大会から、天候による影響が大きく作用すると思われる。今年度の相撲大会当日は、天候が不安定で風も強く肌寒い一日であったことから、相撲大会をもうやりたくないと回答したことが推測される。